

# 岡部 友彦 さん

コトラボ合同会社

今あるものを生かし、新たな色を加えながら、  
その土地の個性を引き出していききたい



きっかけレポートのラストを飾るのは、コトラボ合同会社の代表岡部友彦さん。地方や海外からの旅行者など、多くの人々が利用する格安ホステルを運営しているヨコハマホステルヴィレッジをはじめ、様々なプロジェクトを実施しながら寿町の活性化に取り組む岡部さん。ホステルのフロントでお話を伺いました。

## ◆ホステルで寿町に新たな風を

大学、大学院と建築学を専攻した岡部さんが寿町に関わるようになったのは、ある日寿町で緑化プロジェクトを行っているNPOと出会ったことがきっかけだとか。空き部屋が多くて困っているという簡易宿泊所のオーナーさんの話を受けて始まったのが、空き部屋を旅行者向けに提供する事業を行なうヨコハマホステルヴィレッジです。2004年にプロジェクトを開始、2007年にコトラボ合同会社を設立しました。ホステルのシングル1泊3,000円という安さとアットホームな雰囲気を受け、延べ70カ国から約3万人のお客さんが訪れています。

「危なくて怖いドヤ街」という外部からのイメージに対して、現在では高齢化がかなり進み、福祉の街としての色合いが強まってきた寿町。そこには「昔懐かしい下町のような温かさ」があると語る岡部さん。そんな寿町ならではの魅力の発信や、昔のイメージとのギャップ解消のため、ホステル経営、寿町の住民へ投票を呼びかけた選挙キャンペーンや地域イベントの運営を通じた観光客・若者の呼び込み、プロモーションムービーの制作などを積極的に行なっています。

## ◆ゼロからでもアクションは起こせる

最近、岡部さんが行っているような、社会課題に対してビジネスの要素を取り入れた手法で活動を行っていく「ソーシャルビジネス」が日本でも注目され出しています。とはいえ、まだまだ多くの人には馴染みが薄いもの。事業を立ち上げる際にはかなりの手間や費用がかかったのではないのでしょうか。

「起業するにはお金が要するというイメージがありますが、僕の場合は初期立ち上げに必要な費用はほとんどかかりませんでした。ウェブサイトも自前で作ったし、ホステルのフロントも建築科の学生などと一緒に自分たちで材料や道具を持ちこんで改修作業を行いました。ホステル経営に必要な空き部屋はもともとあるわけだし、ゼロベースでもやってみれば意外となんとかなるものです。」

と、立ち上げ時の様子を語る岡部さん。空き部屋が多い寿町の環境に着目したビジネスモデルに、自身の専門性やネットワークを活かしながらのアクション、これから市民活動を始めたいと思っている方も、アイデアや環境次第でゼロからの挑戦が可能かもしれません。

「また、ソーシャルビジネスを立ち上げるような人には、何か特別な才能や明確なビジョンが無いとダメなのではないかと萎縮してしまう人もいるかもしれませんが、まず事業を起こしてみて、そこからビジネスを続けていく中で新たに増えてくるものも多いです。視点を変えながら色々なアクションを起こしていくことが大切だと思います。」

と、アクションを起こしながら試行錯誤を続けていくことの意義についても語ってくれました。

## ◆点から面へ、境界線を越えてさらなる広がりを

2010年10月と2011年2月には、新しい試みとして「ishikawacho 裏っかわ市」という地域イベントを開催しました。これは、寿町も含めたJR石川町駅の西側一帯で、各店舗やアーティストと強力して行なった地域交流イベントです。

「寿町という枠に限定しすぎず、時には境界線を崩して、広い地域を巻き込んでいくことも必要だと思います。最終的には横浜全体を一体の空間として捉えて、何か出来ないかなと考えています。」

また、活動地域の広がりのみならず、岡部さんを取り巻く仲間の輪も着実に広がっているようです。

「第1回の裏っかわ市ではファッションショーを行なったのですが、これをきっかけに学生と寿町の地元の人が交流を持てたことは良かったです。」

と、世代間交流の広がりについても語ってくれました。

また、「市民活動きっかけレポート」でインタビューした方とも岡部さんは深いつながりがあります。第2回の中ムラサトコさん、第4回のNOGANの浅野さん・茂木さんとは「裏っかわ市」をはじめとした様々な企画でコラボレートしています。



「活動していくなかで、横浜の他の市民活動家とのつながりも増えてきました。ホステルのお客さんがきっかけでアーティストの方との縁がつながったりもして、面白いです。また、観光や社会貢献事業に熱心な海外諸国、特に韓国から視察に来られる方も多いです。」

岡部さんの魅力に自然と惹かれ、多くの仲間が集まってくるのかもしれないね。

## ◆公共の担い手として、一人一人がアクションを

さらに、公共空間を市民や企業が担っていくことの意義についても語ってくれました。

「昔は天動説が信じられていたように、人間というのは思い込みの生き物です。自分の家という私的空間に対して、家の外の公共空間は自分ではなく行政が面倒を見てくれるものだと思い込みがちです。しかし時代が変わってきたこともあり、行政だけでは対応出来ない問題も増えてきました。自分の身を取り巻く環境としての公共空間を、自分たちで形作っていくのだという意識で市民や企業の立場からもアクションを起こしていくべきなのだと思います。」

と、公共の担い手としての一人一人の参画の大切さを語る岡部さん。

「お互いの得意なことを持ち寄り活かしながら、行政と市民や企業が対等な立場で連携していくことがこれから大事になってくると思います。」

横浜市とコトラボが連携した例として、ソーシャルビジネス紹介パンフレットを作成。これをきっかけに、市民活動やソーシャルビジネスが更に盛り上がっていけば良いですね。

## ◆今あるものを生かし、新たな色を

最後に一つ、岡部さんにとって思い出深いエピソードを話していただきました。

「寿町の職業案内所前のアーチは、昔住民がドラム缶を置いてたき火をやっていたために煤で真っ黒なのですが、たき火が禁止になったあとに、アーティストの方が煤の地の黒を活かしたまま、その上にチョークで絵を描くという企画が実現したんです。煤の汚れだとしてもそれを全部塗っちゃうと歴史を消すことになってしまうと僕は思っていたので、嬉しかったです。」

と、寿町らしさが活かされたアート作品誕生の瞬間について語る岡部さん。

「コトラボの活動も、これまでの寿町の歴史を全て否定し忘れ去ってしまうのではなく、歴史を受け継ぎながらそこに新たな色を加えていくというイメージでやっています。寿町に限らず自分の生まれ育った横浜の街は大好きなので、だからこそ既存の思い込みにとらわれず、視点を変えながら色々なことに挑戦し、新たな個性を引き出していきたいと思っています。」

横浜市や民間企業、アーティストやボランティア、様々な仲間と協力しながら地域づくりに取り組む岡部さん。みなさんも是非仲間に加わって、一緒に横浜を盛り上げていきませんか。

